

大 学 史 研 究 通 信

第 77 号 2014 年 1 月 31 日 (金)

大学史研究会

第 77 号の内容：訃報・喜多村和之先生・第 36 回大学史研究セミナー参加記・会費納入のお願い・1880 年代教育史研究会からのご案内・「企画展：近代日本の幕開けと私立法律学校」開催のお知らせ・『大学史研究』編集委員会からのお知らせ・事務局からのお知らせ・編集後記

訃報・喜多村和之先生

さる 2013 年 12 月 25 日、喜多村和之先生が逝去されました。
喜多村先生は、高等教育の分野で数多くの業績を残されました。
謹んで哀悼の意を表します。

喜多村和之先生を偲んで

大川一毅 (岩手大学)

ここ数年、ご体調管理のことから喜多村先生に直接お目にかかる機会はありませんでした。しかし、みちのくの季節折々をはがきにてお知らせし、それを読んでいただくご様子を奥様からお返事頂戴しておりました。

今、喜多村和之先生ご逝去の報に接し、悲しみを深くしております。

喜多村先生は、日米高等教育の比較研究を礎石にすえながら、日本の大学の過去・現在・未来を考え、多くのご教示を下さいました。喜多村先生のご研究やご指導から、高等教育研究を志した方々も多いことでしょう。

「大学のマス・ユニバーサル化」、「学生消費者」、「大学淘汰」、「アカウントビリティー」、「大学評価」など、今日では大学で日常的に使われるこれらについても、先生は、日本の大学の来たるべき課題として、当時、先駆けとなって問題提起されました。時代や社会の現実を見据えながら、しかし安易におもねるのではない「芯」のある日本の大学のありかたを先生は探求なさいました。先生の著作や論考を再読させていただくたびに、そのつど多くの教示を与えて下さいます。

学生時代、私が最初に読んだ喜多村先生の著作は、今は亡き父が購入した本でした。父が付した赤線箇所、やはり私も印をつけていました。喜多村先生のお考えが、一つの著作を通じて父から子に継承されました。これからも、先生の意志やお考えが多くの人々を通じて伝えられましょう。

私は、大学の教場で喜多村先生から直接のご薫陶をたまわった「指導学生」ではありません。在籍当時の大学院（教育学専攻）にあって「大学や高等教育を研究したい」という意志は、ともすれば「異端」でした。ですから研究のやり方や文献探しも手探りでした。その時、自分の教科書の一つとしたのが、喜多村先生の著作でした。大学院課程が終わる頃、「学部の大先輩」としての喜多村先生にご挨拶させていただく機会を得ました。それから以後、大学訪問調査や研究会の参加など、お声がけをいただくようになりました。奥様もご一緒した金沢訪問。名古屋の訪問では「きしめんのおいしいところがある」とのお言葉に期待したら、寒風すさぶ新幹線ホームの立ち食いだったこと。懐かしい思い出です。

宮澤賢治の世界がお好きだった喜多村先生。賢治ゆかりの岩手山や小岩井農場の写真だよりをお送りすると、かつて旅行したことを懐かしそうに思い出して下さったとのこと。大学の居室から雄大な岩手山を仰ぎ、喜多村先生をお偲びします。

ご冥福をお祈り申し上げます。

また、これまでなにより先生を支えて下さいました奥様、ご家族様には心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

喜多村和之先生を偲んで

杉谷祐美子（青山学院大学）

暮れも押し詰まった頃、喜多村先生の突然の訃報をうかがい、しばらくは信じられない思いでおりました。古希のお祝いにご自宅を訪問した折に見せてくださった、少しはにかまれたような笑顔が今でも忘れられず、正直なところ、いまだにびんとこないところがございます。

私は先生が早稲田大学大学院でゼミを開講された最初の年に、修士課程に入学いたしました。以来、先生からは「ゼミの最初の学生」と呼ばれ、紹介していただくようになりました。先生のゼミには学生時代はもとより、学振の연구원や非常勤講師時代も含めてちょうど10年間、出席させていただき、最も長くゼミに在籍した指導生です。

今でこそ高等教育に関する学会は複数存在し、多くの会員を擁するほどに隆盛していますが、喜多村先生は「高等教育」という言葉がまったく馴染みのなかった頃より、国立国会図書館で大学問題について調査をされてこられました。そのご功績によって広島大学に迎えられ、その後は放送教育開発センター、国立教育研究所、早稲田大学、日本私立大学協会附置私学高等教育研究所と、さまざまな機関において教育と研究に心血を注がれてきました。私などがご紹介するまでもないことですが、まさに、高等教育研究のパイオニアでいらっしゃいます。

残された著作は大変多く、研究室でいつも執筆に明け暮れていらっしゃったお背中を懐かしく思い出します。大学を取り巻く環境の変化、とりわけ市場と政策の動向を敏感にキャッチされながら、高等教育の拡大、学生消費者主義、大学評価、大学教育など、後年問題になるようなテーマを次々と手懸けてこられました。その一方で、「大学とは何か」といった根本的な問いかけを決して忘れず、古典や先人の偉業に立ち返ることの重要性を教えてくださいました。先生は常に、時代の先をみつめ続けてこられました。「次に何が問題になるかを考えないといけない」というお言葉が、深く心に刻み込まれています。その卓見したご見識と説得力に満ちたご主張の数々は、今日でも色褪せることなく、むしろこの混迷した大学改革の時代に立ち返るべき原点のように思われます。

学術研究面でのご指導にはもちろん言葉に尽くせぬほどに感謝申し上げますが、それ以上に私が学ばせていただいたのは人としての生き方でした。それは、自分の関心のないようなことや役に立ちそうにないことも、貴重な勉強の機会と捉えて、ありがたくお引き受けさせていただくこと、また、こうした人との出会いやご縁を大切に、感謝の念をもって礼を尽くすこと、そして、自分が正しいと思ったことは、どんな権威や苦難にも負けず、最後まで貫き通すことです。人としての謙虚な姿勢、深い感謝の念、強い信念、自分にとってはいまだに大きな課題ですが、それでも現在、曲がりなりにも大学の教壇に立つことができるようになったのはこうしたご指導の賜物と思います。

先生が二度目の手術を受けられた後、退院されてほどないにもかかわらず、タクシーで早稲田まで通われ、車椅子でゼミのご指導をして下さいました。さぞやお辛かったことと思いますが、それでも学生たちに心配を掛けまいと笑顔を見せてくださった喜多村先生。教育者としての先生のお姿に、熱いものが込み上げてきたことを憶えています。

喜多村先生への心からの感謝の気持ちを込めて、今は静かにご冥福をお祈り申し上げます。そして、長年先生を支えてこられた奥様はじめご遺族の皆様に、謹んで哀悼の意を捧げさせていただきますと思います。

喜多村和之先生略歴

1936年東京生まれ。早稲田大学文学部卒業、東京都立大学大学院人文科学研究科中退。博士（人間科学、大阪大学）。国立国会図書館、広島大学、放送教育開発センター、国立教育研究所、私学高等教育研究所、早稲田大学などに勤務。広島大学名誉教授。

著書：『高等教育の比較的考察』『大学教育の国際化』『大学淘汰の時代』『大学評価とはなにか』『現代アメリカ高等教育論』『大学への旅』『人は学ぶことができるか』『新版 学生消費者の時代』『現代の大学・高等教育』『現代大学の变革と政策－歴史的・比較的考察』『大学は生まれ変わるか』ほか

編著：『大学教育とは何か』『現代の大学院教育』『アメリカの教育』Changes in the Japanese University『高等教育と政策評価』ほか

訳書：トロウ『高学歴社会の大学』リースマン『高等教育論』ヘファリン『大学教育改革のダイナミクス』スチュワート、スピル『学歴産業』ボイヤー『アメリカの大学・カレッジ』カー『アメリカ高等教育』カー『アメリカ高等教育の歴史と未来』ケルズ『大学評価の理論と実際』トロウ『高度情報社会の大学』ほか

本通信の「復刻版」によると、喜多村先生が大学史研究会に参加されたのは、1970年12月に開催された「大学史セミナー」（於・浜松市「浜名荘」）のようです。本通信にご寄稿頂いた喜多村先生のご論考は、以下のとおりです。

『大学史研究通信』第4号（1971年6月）

<大学史研究への関心>「私の『大学史』への関心」

<文献紹介>ヘファリン『大学改革の力学』

『大学史研究通信』第5号（1972年1月）

<大学改革の歴史的検証>「大学改革の可能性に関する試論（1）－大学史の経験から－」

『大学史研究通信』第7号（1973年12月）

「Institutionとしての大学」

『大学史研究通信』第8号（1974年8月）

<シンポジウム>「Accreditationの受容過程に関する日米比較」

第36回大学史研究セミナー参加記

2013年10月26日（土）、27日（日）、中央大学・後楽園キャンパスにおいて、第36回大学史研究セミナーを開催致しました。前号の「開催校からの御礼」に引き続き、セミナー参加記を掲載致します。

第36回研究セミナーの参加記

仙波克也（広島大学名誉教授）

10月26・27日の2日間にわたり中央大学後楽園キャンパスで開催された大学史研究会の第36回研究セミナーに久しぶりに参加した。

初日には、ウィスコンシン大学マディソン校のネルソン（Adam R. Nelson）教授が、“Nationalism, Internationalism, and the Origins of the American University”、中央大学の北井辰弥教授が「中央大学の二人の創立者」と題してそれぞれ講演をされた。

ネルソン教授は、パワー・ポイントを用いて独立戦争後から1840年代までのアメリカ大学のなかに近代的な研究大学が見いだされることを論証された。本記念講演では、植物学と地質学の研究者達の事例を取り上げ、ナショナリズムとインターナショナリズムが相互に影響し合い、学問や科学の制度化を促すとともに、近代的な研究大学が出現したことを解説された。特に、バートン（Benjamin Smith Barton, 1766-1815）やボールドウィン（William Baldwin, 1779-1819）等の植物標本の収集や植物園の設置、ロジャース（Henry Darwin Rogers, 1808-1866）やシリマン（Benjamin Silliman, 1779-1864）等の地質学者のアメリカ国内外での地質調査と資源（主に石炭）の探索やイギリスとアメリカの石炭争奪戦等を辿り、植物学や地質学の制度化が促進されたことを具体的に話された。大学史を新しい観点から見直し、学説を再構築する歴史学の面白さに魅了された。

北井教授は、幕末から明治初期の法学研究や法学関係の教育機関について説明された後、英吉利法律学校（中央大学の前身）の創立者の菊池武夫（1854-1912）と増島六一郎（1857-1948）の思想や創設時期の英吉利法律学校の実態について詳しく講演された。なお、当日、紹介された菅原彬州監修『超然トシテ独歩セント欲スル』（中央大学出版部、2013）には英吉利法律学校の開校式、カリキュラムや菊池武夫の法学通論講義等の論文が収録されており、英吉利法律学校の実態がよくわかる著書である。

自由研究発表数は3件で、日本、アメリカとイギリスに関する研究発表であった。玉蟲文一（1898-1982）のジェネラル・エデュケーションに関する思想、女性研究者の地位確立のための女性研究者支援と専門学会の結成やイギリスの大学における教育の質と水準の保証をめぐる取り組みの事例等が発表された。ジェネラル・エデュケーションの問題、女性研究者の権利と地位の確立や大学教育の質と水準の保証は大学研究の重要な研究課題であり、いずれの研究発表も研究課題を踏まえながら歴史的な視点から検討された内容であった。

第36回研究セミナーは、講演も自由研究発表も参加者にとって興味深い研究であり、内容の充実した研究会であった。また、懇親会は、台風の影響により会場を文京シビックセンターの椿山荘に変更して催された。宴も盛り上がり、研究交流や親睦の輪も広まり、盛会のうちに終了した。大学史研究へのパワーをいただいた。

最後に、グローバル化時代の今、大学史に関する国際的な研究交流が必要不可欠である。今回のような外国の研究者の招聘とともに、海外の大学史研究者と連携し、研究会、シンポジウム、大学史ツアーや大学史研修事業等を大学史研究会の一環事業として企画し、推進することをお願いしたい。

2013年度までの年会費未納の方へー納入のお願いー

大学史研究会の収入は、会員各位からの年会費（一般会員：5,000円、大学院在学・日本学術振興会特別研究員：3,000円）に大きくよっております。

2014年1月31日現在、2013年度の全会員数に対する年会費納入率は71.3%であり、未納の会員も少なからぬ状況です。研究会の円滑な運営と発展のために、ご理解ご協力をお願い申し上げます。

年会費3ヶ年度分以上の滞納の会員各位につきましては、研究会への継続参加のご意志を年会費納入によって確認できるまで、大学史研究会からの諸連絡や「研究通信」、『大学史研究』（紀要）等の発送を停止する規定になっております。該当する会員各位へのご連絡通知にはこ

の点も記載されておりますので、こちらもご留意願います。

なお、本通知と入れ違いに納入いただきました場合には、何卒ご容赦のほどお願い申し上げます。

—— 年会費納入払込先 ——

郵便振替口座： 大学史研究会 口座番号 00120-3-47583

または

銀行口座 : 大学史研究会 三井住友銀行 池袋東口支店 (店番 671)
普通預金 (口座番号 3456109)

(事務局会計担当：山崎慎一)

1880年代教育史研究会からのご案内

「1880年代教育史研究会」(会員：荒井明夫・神辺靖光・谷本宗生・小宮山道夫・田中智子・鄭賢珠・佐喜本愛・三木一司・福井淳・富岡勝)による『1880年代教育史研究会年報』第5号(2013年10月発行)と、科研費成果報告書『1880年代におけるエリート養成機能形成過程の研究—高等中学校成立史を中心に—』(代表：荒井明夫、2014年1月刊行、年報の第1号～第5号までの論文も掲載)が完成致しました。

送付料のみのご負担で、送付致します。ただし、品切れの場合はご容赦下さい。目次は、下記の研究会サイト内のニューズレター第43号および第44号でご覧いただけます。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/index.html>

(情報提供：富岡勝会員(近畿大学))

「企画展：近代日本の幕開けと私立法律学校」開催のお知らせ

明治大学博物館において、標記の企画展が開催されます。これは、明治期の神田地区で私立法律学校として発展した専修大学、中央大学、日本大学、明治大学の大学史資料をもとに、神田学生街や旧民法・商法の施行をめぐる法典論争について紹介するものです。四大学のアーカイブを利用した初の企画展で、明治期の私立法律学校の実像に迫るとともに、当時の学生が下宿・通学・勤労の場としていた明治期の神田地区についても、大学に残された資料から、その一端を紹介していきます。

この企画展の主催・協力は、本研究会機関会員であり、後援組織の一つは、本研究会会員が関わっている全国大学史資料協議会です。2月1日にはギャラリートーク(11:00-15:00-)が開催される予定です。開催中に神田駿河台にいらっしゃる方は、是非お越しください。

記

会期：2014年1月24日(金)～2月28日(金) 10:00～17:00(日・祝日も開室)

会場：明治大学博物館特別展示室(駿河台キャンパス・アカデミーコモン地下)・入場無料

主催：専修大学大学史資料課 中央大学大学史編纂課 日本大学大学史編纂課

明治大学史資料センター

協力：獨協学園史調査研究資料センター 法政大学史センター

後援：千代田区 神田古書店組合 全国大学史資料協議会東日本部会

朝日新聞社 毎日新聞社 読売新聞社

『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

編集委員会では、2014年12月をめどに第26号を刊行する予定です。当面の編集委員会開催予定日は、1月31日、3月27日、5月2日です。第26号での掲載を希望している会員におかれましては、なるべく5月2日以前に原稿を事務局紀要担当までお寄せください。また、編集委員会より会員の皆様に特集や寄稿・査読の依頼をお願いすることがありますので、その際にはご協力いただけますようお願い致します。

事務局からのお知らせ

大学史研究会事務局では、活動をサポートしていただく事務局員を募集しております。自薦・他薦どちらでも結構ですので、岡田 (daishi@home.nifty.jp) までお知らせください。

編集後記

本号編集中に、田中征男先生も昨年末に逝去されたとの報に接しました。謹んで哀悼の意を表します。ご経歴などは、次号に掲載致します。

(事務局通信担当：長谷部圭彦)

『大学史研究通信』第77号の編集は、事務局・長谷部圭彦が担当致しました。

連絡先：hasebekiyohiko@hotmail.com

『大学史研究通信』第78号は、2014年4月30日発行予定です。

大学史研究会事務局

<事務局連絡先>

〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

中央大学法学部 研究室受付 岡田大士気付 大学史研究会

Tel&Fax: 042-674-3151 E-mail: daishi@home.nifty.jp

ホームページ <http://daigakushi.jp/>

事務局へのお問い合わせは、なるべく下記代表 E メールアドレスまでお願いいたします

E-mail: jshshe@daigakushi.jp

大学史研究会事務局員 (五十音順)

浅沼 薫奈 (大東文化大学)

井上 美香子 (九州大学大学文書館百年史編集室)

岡田 大士 (中央大学)

五島 敦子 (南山大学短期大学部)

長谷部 圭彦 (上智大学等)

深野 政之 (大阪府立大学)

山崎 慎一 (桜美林大学)